

国際開発研究フォーラム

FORUM OF INTERNATIONAL DEVELOPMENT STUDIES

なぜ低カーストは高カーストよりも 返済状況が良好なのか

——生計戦略が金融行動に与える影響——

太田智之

Why is the Repayment of Lower Caste Better than That of Higher Caste?
——An Effectiveness of Livelihood Strategy in Microfinance——

Tomoyuki OTA

45-5

名古屋大学大学院国際開発研究科
GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL DEVELOPMENT
NAGOYA UNIVERSITY

なぜ低カーストは高カーストよりも 返済状況が良好なのか

——生計戦略が金融行動に与える影響——

太田 智之*

Why is the Repayment of Lower Caste Better than That of Higher Caste?
——An Effectiveness of Livelihood Strategy in Microfinance——

Tomoyuki OTA

Abstract

This article examines the effectiveness of livelihood strategy in Microfinance. The livelihood strategy emphasizes the complexity and diversity of the financial behavior in developing countries. At the field research in Nepal, it is found that the repayment situation of lower caste is better than that of higher caste. This article aims to clarify the background of this phenomenon from view point of livelihood strategy. In order to analyze the effectiveness of livelihood strategy clearly, the financial behavior is recognized as a series of behavior. “expenditure”, “borrowing” and “repayment”. In addition, “Time Preference” which is the analytical concept for intertemporal decision making is also introduced. In the analysis, three major results are achieved. The first is livelihood strategy influences the financial behavior through various elements like economic activity and social capital etc. The second is the affinity between livelihood strategy and financial scheme also has some impacts to financial behavior. These results are consistent with the literature review. The third is the effectiveness of livelihood strategy is recognized at each step of financial behaviors. This means the effectiveness of livelihood strategy to the financial behavior is more complex than the literature review. The analysis by time preferences also supports these results.

1. はじめに

本研究の目的は、ネパールにおけるフィールド調査で確認された「低カーストの返済状況が高カーストよりも良好である」という現象の解明を通じて、生計戦略が金融行動に与える影響を明らかにすることである。

生計 (Livelihood) とは家計の「資本 (自然資本, 物的資本, 人的資本, 金融資本, 社会資本)

* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程在籍。2名の匿名のレフェリーの先生方には貴重なコメントをいただいた。ここに記して謝意を表したい。

や生産活動、及び組織や社会関係により提供される活動へのアクセス (Ellis 2000: 10)」と定義され、家計による生存への行為のみを漠然と指すだけではなく家計を取り巻く脆弱性や法制度などの社会的文脈までも含む概念である (Ellis and Freeman 2005: 4)。一方、「戦略」とは「長期的な計略 (大辞泉)」であり、ある目標に対し最適な手段の選択を意味する。このことを勘案すると、生計戦略 (Livelihood Strategy) とは生存 (= 目標) の為に、ある社会的文脈の中でこれら5つの資本をどのように活用して経済活動を行うのか (= 手段) を指す概念であると解釈出来る。

先行研究では同一地域、同一民族であっても生計戦略が異なることにより最適な金融行動が異なることや生計戦略を考慮しない金融スキームは機能しないことが明らかにされている。このことは生計戦略が金融行動に対し一定の影響を与えていることを意味している。一方、これらの先行研究では生計戦略が金融行動に対しどのように影響を与えているのかという点について、未だに確立された理論がある訳ではない。生計戦略の金融行動への影響をより詳細に明らかにすることは、貧困削減に資するマイクロファイナンスの構築に資する。この為、本研究はネパールのフィールド調査で確認された「低カーストの返済状況が高カーストよりも良好である」という現象を題材に、この問題にアプローチするものである。

本論文の構成は、第2章で生計戦略とマイクロファイナンスを巡る先行研究を整理する。その後、第3章ではフィールド調査デザインを概観し、第4章ではこのようなフィールド調査から得られた結果を整理する。この結果を受け第5章では生計戦略が金融行動に与える影響を考察し、第6章では全体の議論をまとめ、結論を導く。

2. 生計戦略とマイクロファイナンス

生計戦略の視点がマイクロファイナンスで用いられるようになった背景は、マイクロファイナンスの実践や研究が、貸手の視点から行われてきたことへの不満や限界がその根底にある。

例えばHuq (2004) は、バングラデシュのある一人の借手によるマイクロファイナンスの利用遍歴を追う中で、マイクロファイナンス機関が借手の意思を十分にくみ取らぬまま金融サービスや技術訓練を提供している実態を明らかにし、マイクロファイナンス機関の中央集権的なシステムが「借手の人生を管理 (Huq 2004: 48)」することに繋がっていると批判している。一方Rahman (2004) は、現在までのマイクロファイナンス研究を概観し、マイクロファイナンスの貧困削減に対する効果は「不十分であるか、むしろ悪化させている (Rahman 2004: 39)」と述べている。Rahman (2004) はこの理由を、マイクロファイナンスの貧困削減に対する効果は借手の視点ではなく「顧客数」や「利益率」などマイクロファイナンス機関側の組織的成果で図られている為と指摘している。その上で、貧困削減に対し効果のあるマイクロファイナンスの構築に向けて借手の視点に立った金融商品の開発と、その為の借手の生計戦略への理解の必要性を強調している。またRutherford (2004) は、このような金融商品ばかりでなく、金融商品を借手に届ける金融サービスの在り方についても、借手の視点に立ったものである必要性を強調してい

る。Rutherford (2004) はバングラデシュのマイクロファイナンス市場においてマイクロファイナンス機関の占める割合は低く、その多くはインフォーマルな在来金融組織が占めていることを明らかにした上で、マイクロファイナンス機関はそのシェアを伸ばしていく為に、簡素な設計でありながら高度な柔軟性を有する「オムニバス・アプローチ (Rutherford 2004 : 275)」が必要であると指摘している。また、このようなアプローチの為に借手の生計戦略を把握する重要性も強調している。

このような背景の中、マイクロファイナンス研究において生計戦略の視点が用いられるようになった。その研究の多くは、生計戦略が借手の金融行動やマイクロファイナンス機関の施策に対しどのような影響を与えるのかという視点から行われている。

Zoetelief (2004) は、生計戦略が異なることで人々の金融行動に関する意思決定が異なることを明らかにしている。この論文はタンザニアの村落を調査し、同一村内においても「牛飼人 (Cattle-Keeper)」「穀物生産者 (Paddy Cultivator)」「村役場の役人 (Village Officer)」「女性 (Female Group)」では、その生産構造 (収入源)、社会関係、資金の捉え方などの違いから生計戦略が異なり、そのことにより貯蓄方法が異なることを明らかにしている。

またMazzucato & Niemeijer (2004) も、ブルキナファソにおけるグルマンチェ族の貯蓄方法が異なる点に着目している。元来グルマンチェ族は伝統的な平等主義が強く、財産を秘匿する傾向が強い。このことから、牛の放牧を生業とするラマ族と歴史的関係が深い地域のグルマンチェ族は、財産を牛に換えラマ族に放牧を委託する形で財産を保全している。一方、ラマ族との関係が薄い地域では同じグルマンチェ族であっても金銭で貯蓄する傾向が強いことが明らかになっている。

またLont (2004) は、インドネシア都市部において突然メンバーが返済しなくなり失敗したSelf-Help Groupの事例を、特に連帯保証制が機能しなかったことに着目し調査を行った。そして、この原因をインドネシアでは目上の人に対し面と向かって意見することは「恥」との意識があり、このような意識が連帯保証制を機能させなかったことを明らかにしている。

一方、Hospe & Prose (2004) は、ポスト植民地時代のアフリカで何故、在来金融グループは大規模な正規金融機関に進化せず、小規模で未登録のままに留まるのかと問題提起をしている。その上で同論文は、このような在来金融グループは、低所得地域で金融資産へのアクセスが乏しい多くの女性達にとって日常的に変化する資金ニーズに柔軟に対応していることを指摘した上で、このような在来金融の組織的なダイナミズムを理解する必要性を強調した。

このように先行研究では同一地域や同一民族においてもその生計戦略により貯蓄方法が異なるなど、生計戦略により最適な金融行動が異なることが明らかにされている。一方、これらの研究では生計戦略がどのように金融行動に影響を与えるのかについて、確たる理論が確立されている訳ではない。

本研究ではこのような先行研究の知見を踏まえた上で、生計戦略の金融行動への影響をより明確に分析する為に①金融行動を「支出」「借入」「返済」に分けること¹、及び②異時点間の意思決定を分析する概念である時間選好 (Time Preferences) を取り入れる工夫を施した。

まず金融行動を「支出」「借入」「返済」に分けることにより、それぞれの段階における生計戦略の影響を把握することが可能となり、より詳細な分析が出来る利点がある²。

また時間選好は、異時点間の意思決定において「将来」と「現在」のどちらに比重を置いて意思決定を下すのかを表す概念である (Frederick, Loewenstein & O' Donoghue 2002)。具体的には、時間選好は「現在」時点と「将来」時点におけるそれぞれの現在割引率の関係により把握される。即ち「現在」時点の現在割引率が「将来」時点のそれよりも高い場合は「現在」に比重を置いていると捉えられる一方、「将来」時点の現在割引率が「現在」時点の現在割引率よりも高い場合は「将来」に比重を置いていると捉えられる。

従前の正統派経済学では「現在」と「将来」の現在割引率が同じ場合を想定して、現在割引率の高低が異時点間の効用最大化に与える影響に関する議論がされてきた (Samuelson 1937)。金融行動との関係では、現在割引率の高い人は「せっかち」、低い人は「忍耐強い」と捉えられ (池田2012: 11)、高い現在割引率の人は融資借入額が高くなることが確認されている (池田・大竹・筒井2005)。このような議論には人は時間や場所に関わらずある決まった一つの現在割引率を内在しているという「完全合理性」の前提が置かれていた。

一方、時間選好を研究する行動経済学は、このような完全合理性の現実妥当性に対する疑義から発生した学問領域である。即ち行動経済学では時間の経過により現在割引率が変化することを「限定合理性」として捉え、「将来」よりも「現在」に比重を置いて意思決定を行う「現在バイアス選好 (Present-Biased Preferences)」は肥満、喫煙、薬物中毒及び多重債務などの社会的病理に陥り易いことを明らかにしている³。

本研究ではこのような異時点間の意思決定に関する知見を踏まえつつ、より現実に即した分析を志向する観点から、完全合理性を前提とする現在割引率の高低の視点ではなく、行動経済学の時間選好の視点を主に用いることとし、必要に応じて現在割引率の高低の視点も取り入れることとする。尚、本研究において重要なことは、時間選好が時間軸における意思決定の比重を示す概念であるという点である。即ち、生計戦略の概念においても「目標」に対する「手段」を考える上で既にこのような異時点間の意思決定に繋がる要素も含まれているが、本研究ではこのような時間選好の概念を取り入れ「将来」に比重を置く人と「現在」に比重を置く人を対比することで、生計戦略における「手段 (=行動)」の特徴をより明確に把握出来るものとする。

3. フィールド調査

3.1 調査方法

本研究では、ネパールの首都近郊にあるバディケル村を対象にフィールド調査を実施した。この調査は2013年8月22日～11月9日 (80日間) と2014年1月23日～3月30日 (60日間) の2回実施された。

第1回目の調査では、調査村の概要把握を目的に質問票を用いた全戸調査 (663世帯) を実施し、「世帯人数」「カースト」「学歴」「資産」「主要支出」「金融行動」「時間選好」などの項目に焦点

を当てた。また第2回目の調査では、第1回目の調査で明らかになった家計及び金融行動の社会的背景を明らかにすることを目的に、高カースト52世帯と低カースト51世帯の計103世帯に対しインタビュー調査を実施した⁴。尚、これらの調査は全てネパール語で実施されている。また以下の議論で提示される図表のデータは、特段の断りがない限り全戸調査の結果を集計したものである。

3.2 調査村の概要

調査村であるバディケル村は、カトマンズ市街地から南にバスで1時間ほど行ったところに位置する郊外の村である。総人口は3,286名であり、この内、高カーストの1,181名と低カーストの2,105名が居住し、異なるカーストが混在する村である⁵。同村は東西に横長く、この東から西に向かって舗装された道路が1本走っている。この道路は村内で唯一の舗装道路であり、村内の中央よりやや西寄りの地点にあるバスパークで道路の舗装は終わっている。この道路の周辺は平らな地形となっている一方、この道路から離れるにつれて急峻な森林区域が広がっている。高カーストの多くは村の入口付近や舗装道路沿いの平らな地形に居住する一方、低カーストはこの高カーストを取り囲むように主に森林区域に居住している。

同村の特徴は、①同じ村に高カーストと低カーストの両方が居住しており両カースト間の比較が可能であること、②カトマンズの郊外にあり経済活動が活発であること、一方で③ネパールの他の地域と同様、正規金融機関⁶の進出はあまり見られず協同組合や在来の貯蓄グループなどの在来金融組織⁷が主要な金融仲介機関となっている点である。これらのことから、生計戦略と金融行動に焦点を当てる本研究の調査地として最適であると判断した。

4. 調査結果

4.1 両カーストの生計戦略

本章では調査村における生計戦略を明らかにする為に、まず同村の生計状況を明らかにし、その後このような生計をどのように組み合わせているのかという視点から生計戦略を明らかにする。

4.1.1 両カーストの生計状況

両カーストの生計状況は、先の定義に則り5つの資本、経済活動、社会的文脈の視点から明らかにする。本調査で明らかになった両カーストの生計状況を纏めたものが下表である。尚、表中に記載されている資本や経済活動、社会的文脈は次の定義に基づいて、本調査ではデータを収集した。

まず自然資本は「生存の為に活用される土地、水及び生物資源 (Biological resources) (Ellis 2000 : 32)」と定義される為、本調査では両カーストの土地保有状況に着目した。次に物的資本は、機械などの生産に資するものばかりではなく耐久消費財などの非生産目的のものも含まれる (Ellis 2000 : 32-33)。この為、本調査では住宅の部屋数と家電保有率に着目した。人的資本は、人々の教育状況や技能、健康状況 (Ellis 2000 : 33) と定義され、本調査では22歳以上の成年層

の学歴と子供の私立学校への通学状況を調査した。一方、金融資本は「家計がアクセス出来る資金のストック (Ellis 2000 : 34)」と定義される。金融行動の詳細については後述することから、ここでは融資借入額と貯蓄残高のみを表示した。また社会資本は「広義には個人や世帯が接するコミュニティーや社会的権利 (Ellis 2000 : 36)」と定義づけられる。この為、本調査では「生産活動」及び「社会行事」の実施方法に着目した。経済活動は「家計の生存に対する手段を生み出すもの (Ellis 2000 : 40)」と捉えられることから、本論文では主に就業構造と平均年収に焦点を当てた。そして生計戦略における社会的文脈は「脆弱性コンテキスト」と「政策・組織コンテキスト」として捉えられる (Ellis 2005 : 4-5)。前者は収入の季節性など家計に対するショック要因を指すのに対し、後者は政府の政策や法制度、民主化などを指す。この為、本調査では家計における収入の季節性に着目した。

表1 両カーストにおける生計状況の比較

	調査項目	高カースト	低カースト
自然資本	土地保有率	高い (92.3%)	高い (90.4%)
	土地面積	広い (5.3 ロパニ)	狭い (3.1 ロパニ)
	食糧自給率	多い (5.5 カ月)	少ない (3.0 カ月)
物的資本	【家畜】牛保有率	高い (44.1%)	低い (15.0%)
	家電保有率	高い	低い
	車・バイク保有率	高い (57.2%)	低い (23.7%)
	【住宅】平均部屋数	多い (6.1 部屋)	少ない (5.4 部屋)
人的資本	【成年層】高卒以上	高い (60.7%)	低い (19.0%)
	【児童】私立学校通学率	高い (86.9%)	低い (15.2%)
金融資本	融資借入額	多い (183,468 ルピー)	少ない (42,719 ルピー)
	貯蓄残高	多い (42,995 ルピー)	少ない (8,724 ルピー)
社会資本	農作業	世帯毎に作業(或いは日雇いを雇う)	共同作業
	社会行事	世帯毎に実施 (或いは日当を支払って協力を依頼)	共同作業
経済活動	会社勤め世帯割合	多い (61.0%)	少ない (25.8%)
	農業従事世帯割合	多い (86.0%)	多い (78.6%)
	平均年収	高い (228,740 ルピー)	低い (122,204 ルピー)
社会的文脈	収入の季節変動	少ない (安定収入)	多い (季節変動)

(注) 土地の広さを表す「ロパニ」は1ロパニ=94.05平方メートルである。食糧自給率は保有する土地から1年間の内、何カ月分の食糧を得られるのかを示している。また家電保有率は例えば冷蔵庫では高カーストは44.9%、低カーストは34.2%である他、デジタルカメラでは高カースト27.1%、低カースト9.1%であった。尚「平均年収」は第2回目のフィールド調査におけるインタビュー調査の結果を集計した。

(出所) フィールド調査

両カーストの生計状況で特徴的な点は以下の2点である。

まず1つ目は、高カーストは「自然資本」「物的資本」「人的資本」「金融資本」「経済活動」において低カーストよりも良好な結果を示していることである。このことは、高カーストは経済的に低カーストよりも裕福であることを示している。両カーストでこのような差異が生じている原因は、高カーストは高い教育水準（人的資本）を背景に会社勤めという経済活動に従事することや、非会社勤め世帯であったとしても歴史的に優位な経済状況を初期投資の必要な牛の家畜飼育という経済活動に結びつけ安定収入を得ることにより⁸、年収（フロー）と物的資本（ストック）の両面で豊かさを築いている一方、低カーストは農業や竹細工により収入水準は低く、また季節変動する為である。

2つ目は、両カーストにおける社会資本の違いである。高カーストでは会社勤めが増える中、農作業や社会行事における共同作業は減少しており、共同体的結びつきの弱い社会資本になっている。ある高カーストの女性は「以前は、隣近所が共同で農作業を行っていたが、ここ10年くらいで農作業をする人は減っており日雇いに頼るようになった⁹。」と述べている他、別の高カーストの男性は「最近はみな自分の利益しか考えなくなった。例えば昔は、結婚式は隣近所で協力し合って宴会の準備をしたものだが、最近では日当を払わないと来てくれないし、宴会場ですることも多くなった¹⁰。」と語っている。このような変化の底流には、市場経済化により「会社勤め」が増える中、会社勤めの職を得る為には労働市場の競争に勝つ必要があり、その為には個人（或いは世帯）の努力が求められ最早、共同体的活動や助け合いが機能する余地はなくなっていることが挙げられる¹¹。一方、低カーストでは農作業の他、結婚式や元服式¹²などの社会行事における共同作業は残っており¹³、共同体的結びつきの強い社会資本が残っている。筆者が調査で滞在中に元服式が実施されていたが、高カースト世帯では元服式の儀式やその後の宴会は世帯単位で実施されている一方、低カーストの元服式では、元服式を挙げる世帯以外の世帯も参加し集落をあげてこれらの儀式や宴会が実施されていたのが印象的であった。

4.1.2 両カーストの生計戦略

高カーストの生計戦略上の「目標」は、市場経済化に適合しながら富を維持・拡大し次世代に継承することである。何故ならば、以前の伝統的な農村経済の中では固定的なカースト間関係が存在したが、市場経済の広がりにより高カーストにおいても現在の経済状況や社会的地位が維持される保証がなくなっている為である（岩間 2012：178）。この為、高カーストはこのような現在の経済的優位を維持・拡大する為には、①子供に良い教育を受けさせ将来の年収（フロー）を確保することや、②住宅建設により富を保全することが、生計戦略上の「手段」として認識されている。今般の調査では「子供には将来、高い収入が得られ社会的地位も高い医者になって欲しい¹⁴」といった教育に対する願望や、住宅についても「子供や孫も末長く住めるようにする為に改築した¹⁵。」や「子供たちが将来いろいろな場所に働きにでても、いつでも帰って来られる場所として考えている¹⁶。」といった声が数多く聞かれた。

一方、低カーストの生計戦略では、目の前の収入を確保しつつ生活を改善していくことが「目標」

である。調査村の低カーストにおける生活の改善とは、具体的には低水準で季節変動する収入を安定・拡大させることであり、また住環境を改善させることである。これは収入水準やその安定性は生活の質に直結する課題である一方、低カーストの住居は土壁で出来ており雨漏りをする為、高カーストの住居のようにレンガ作りへの建て替え需要が強い為である。例えば、ある低カースト男性は「竹細工は収入がどうなるかわかからない部分があるので、利益と費用を計算しながら毎日長時間、一生懸命に竹細工に従事している¹⁷。」と述べている他、住環境の改善についても、住宅を建て替えた低カーストの女性はその理由を「以前の家は土で造ってあってよく雨漏りがした為、人間の居住には適していなかった。この為、新しい家はレンガで建てた¹⁸。」と述べている。このように低カーストでは、生産活動と住居改善が生計戦略上の主要な「手段」となっている。

このような両カーストの生計戦略の手段は支出面からも確認できる。今般の調査では各世帯に対し何を「主要な支出」と考えているのか、またその「主要な支出」の支出額は幾らかという点について尋ねた。その結果を纏めたのが下表である。

表2 両カーストの主要支出

	全世帯 (世帯)	住宅		家電・バイク・車		生産活動		社会行事		教育		その他	
		世帯割合	平均支出額	世帯割合	平均支出額	世帯割合	平均支出額	世帯割合	平均支出額	世帯割合	平均支出額	世帯割合	平均支出額
		(%)	(ルピー)	(%)	(ルピー)	(%)	(ルピー)	(%)	(ルピー)	(%)	(ルピー)	(%)	(ルピー)
高カースト	231	25.1	777,690	15.6	282,069	11.7	135,574	81.8	74,603	36.8	119,793	17.1	34,836
低カースト	426	47.4	509,223	7.7	295,773	21.6	79,038	94.6	23,971	5.2	35,977	10.1	23,349

(注) 「住宅」支出と「家電・車・バイク」支出は過去5年間の支出額の総計を、それ以外の支出項目は年間の平均支出額を調査。また「住宅」支出は新築を建てる費用や増改築に掛かる費用を、「生産活動」は農業や家畜飼育、竹細工、自営業に掛かる費用を含む。更に「社会行事」はダサイン祭りなど毎年のお祭りに掛かる費用の他、結婚式や元服式などの費用も含む。尚、「平均支出額」はその支出を「主要な支出」と回答した世帯の支出額のみを集計。

(出所) フィールド調査

両カーストともダサイン祭りなどの社会行事に掛かる費用を「主要な支出」と捉えている世帯割合は高いものの、その支出額はあまり大きくない。一方、高カーストでは住宅支出と教育支出を「主要な支出」と捉えている世帯割合は社会行事に次いで大きく、その支出額も他の支出項目より大きい。また低カーストでは、社会行事に次いで住宅支出と生産活動を「主要な支出」と捉えている世帯割合が多く、またその平均支出額も他の項目より大きい。このように両カーストとも生計戦略上、求められる支出項目を「主要な支出」と捉える世帯割合が高く、またその支出額も大きいことが分かる。このことから両カーストの支出行動は生計戦略により規定されていると言える。

尚、このように両カーストの生計戦略に違いが生じている背景は、①もともと高カーストは社会的に高い地位にあったことから人間同士が素朴に触れ合い信頼するよりも他人を操ることに関心がある一方、低カーストは社会的に不利な状況が置かれていた為、仲間同士で触れ合うことを

導ぶ素朴さがあるというカースト的要因(川喜田 1997: 10 [1987])が下地としてあったところに¹⁹, ②カトマンズ市場の広がりにより高カーストでは就業構造の変化が社会資本の弱体化を招くという経済的要因が原因となって, このような差異が生じたものと考えられる。

4.2 金融行動

4.2.1 金融アクセス

調査村における金融アクセスの状況を纏めたものが下表である。この表で特徴的な点は①両カーストとも貯蓄サービスに80%以上がアクセスしており調査村では金融サービスは広く普及していること, また②両カーストとも協同組合や貯蓄グループなどの在来金融組織へのアクセス割合が高い点である。尚, このような在来金融組織の利用割合の高さは, 融資と貯蓄の双方で見られる。そして, ③その経済状況を反映し高カーストの方が低カーストよりも融資と貯蓄の双方で利用額が大きい。

表3 金融アクセス

	全世帯 (世帯)	融資				貯蓄			
		アクセス 世帯数	アクセス 世帯の割合	在来金融組織 の利用割合	世帯当たり 平均借入高	アクセス 世帯数	アクセス 世帯の割合	在来金融組織 の利用割合	世帯当たり 平均残高
		(世帯)	(%)	(%)	(ルピー)	(世帯)	(%)	(%)	(ルピー)
高カースト	235	108	46.0	70.5	183,468	199	84.7	90.4	42,995
低カースト	428	185	43.2	87.1	42,719	363	84.8	91.5	8,724

(注)「在来金融組織の利用割合」は融資や貯蓄にアクセスしている世帯の内, 在来金融組織の融資や貯蓄を利用している世帯割合。また融資の「平均借入額」及び貯蓄の「平均残高」は, 融資及び貯蓄のアクセス世帯のみを集計した。尚, 「平均借入額」は融資借入額の平均値を求めたものであり融資残高ではない。

(出所) フィールド調査

4.2.2 共同体的信頼関係に立脚する在来金融組織

このような在来金融組織は大小合わせれば村内に無数存在するが, 主要なものは5つである²⁰。これら主要な在来金融組織に共通する特徴は, ①村内の村人が政府やNGO等の外部支援は受けつつも自主的に設立していること, ②融資と貯蓄サービスが行われていること, ③融資や貯蓄の事務手続きは組合幹部がボランティアに近い形で実施していること²¹, ④融資の返済ルールが緩いこと, また⑤両カーストでは利用する協同組合が異なることである。

特に返済ルールについては, どの在来金融組織においても融資の返済期間の最長は1年間であり, その期限内であれば借手が返済期間を任意に設定することが可能である。また, 毎月の利息の支払いは義務付けられているものの, 元本をいつ, 幾ら支払うかは借手の裁量に任されている。更に, 期限内に返済が完了しなくとも返済期間を延長でき, その際の罰則も軽い²²。連帯保証人も形式上は置くことになっているが, 実質的には機能していない。これは, 借手の利便性の向上の為にこのようなサービス内容になっている訳ではなく, ①一部の組織以外は専従の職員がおらず組合幹部が自主的に運営に携わっていること, ②この為, 組合運営は村内の信頼関係の上

に成り立っていること、そして③それ故、たとえ返済の遅延や延滞があったとしても厳しい取り立ては物理的にも人間関係からも難しいことが、その背景にある²³。このように在来金融組織は「お金がある人が、ある時に、あるだけ返済する」という共同体的信頼関係に立脚した金融スキームであると言える。

一方、両カーストで利用する協同組合が異なる背景は、両カースト間に横たわる歴史的な不信心感である。従前は両カーストが利用する協同組合は同じだったが、低カーストだから融資が貸し出されないといった露骨な差別は見られなかったものの、協同組合の事務所が低カーストの居住地域からは遠い高カーストの居住地域に置かれたり、また組合幹部は高カーストで占められている上、そのような幹部の言動が高圧的であったりなど、細かな出来ごとの積み重ねが低カーストの中に鬱憤として溜っていた²⁴。このような下地の上に、①カトマンズ市場の活況による低カースト世帯の家計改善や②教育の普及が重なり調査村では過去5年間に低カースト自身により3つの協同組合が設立された。更に、それらの協同組合へ利用者が流れることにより、両カーストで利用する協同組合が異なるという状況が生じるようになった。

4.2.3 低カーストの高カーストよりも良好な返済状況

これら在来金融組織では融資はコンピューターで管理されている訳ではなく、返済状況を示すデータを貸手側から得るのは難しい。よって今回の調査では、全戸調査の際に「借入金額」「借入時期」「返済期間」「現在残高」を聞き出し、その情報を基に「返済指数」を独自に計算して返済状況を把握した²⁵。この返済指数は数値が高いと返済が順調であることを示す一方、低いと返済が遅延していることを示している。本調査では高カーストの返済指数の平均値は0.44であった一方、低カーストのそれは0.60であり、低カーストの方が高カーストよりも順調な返済状況であった。

また本調査では返済指数の他に延滞率²⁶からも返済状況の把握を試みた。高カーストの延滞率は18.3%である一方、低カーストは16.8%であり、僅かではあるものの低カーストの方が低い結果となった。

このような返済状況を受け、高カーストが利用する協同組合の幹部は「当組合は資金不足であり全ての借入需要に応えられていない²⁷。」と述べている他、組合員も「新規の融資は何カ月も待たされるので、突発的にお金が必要な時には頼りにならない²⁸。」と述べている。調査村の在来金融組織は何れも外部からの資金注入はなく、組合員による貯蓄の預入金と融資の返済された資金が次の融資の原資となっている。また貯蓄は所謂「強制貯蓄」で組合員は毎月一定額以上の貯蓄をする必要があることを併せて考えると、高カーストの協同組合では融資の返済遅延が組合資金の逼迫を招き、新規の融資を希望する組合員が借入機会を逸することに繋がっていると言える。一方、低カーストが利用する協同組合の幹部は「組合資金はあればあるだけ組合員への貸付が出来る²⁹」と述べ、組合員の融資需要は旺盛であることを示唆する一方、組合員の側からは先の高カーストのように借入が出来ないといった不満は聞こえてこない。

高カーストの低い返済指数は、厳密に言えば高カーストの返済状況が遅延していることしか意味しない。しかし組合幹部や借手である組合員からの定性情報を併せて考えると、このような高

カーズの返済状況は単なる返済遅延に留まらず協同組合の金融仲介機能にとって大きな障害となっていることが分かる。

4.3 時間選好

人々が「現在」または「将来」のどちらに比重を置いて意思決定を行うのかを表す時間選好は、「時間選好テスト」によって把握することが出来る。途上国におけるマイクロファイナンスと時間選好との関係を調査した Ashraf, Karlan & Yin (2006) や Bauer, Chytilova & Morduch (2012) などの先行研究では、「現在」並びに「将来」時点の利得をそれぞれ一定期間先延ばした時に回答者が課す追加的な利得から現在割引率を求め時間選好を把握している³⁰。本調査でもこの方法を踏襲し、時間選好テストを実施した³¹。

このような調査により得られた結果は下表の通りである³²。「現在」時点の現在割引率が「将来」時点のそれより高い場合、「現在」に比重を置いて意思決定を行っていると考えられ、行動経済学では「現在バイアス選好」と呼ばれる。また逆に「将来」時点の現在割引率が「現在」時点のそれより高い場合は、「現在」よりも「将来」に比重を置いて意思決定を行っていることを意味している。先行研究ではこのような時間選好を“Patient Now, Inpatient Later (Bauer, Chytilova & Morduch 2012 : 1126)”と表現しているが、本調査では「現在バイアス選好」に倣い「将来バイアス選好」と名付けた。尚、「現在」及び「将来」の両時点で現在割引率が同じ場合は、下表で「変化なし」と表記した。

表4 時間選好と現在割引率

	母数	将来バイアス選好		現在バイアス選好		変化なし		現在割引率		
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	現在	将来	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(%)	(%)	
高カーズ	男性	193	116	60.1	20	10.4	57	29.5	8.5	24.9
	女性	233	149	63.9	17	7.3	67	28.8	7.1	15.7
	合計	426	265	62.2	37	8.7	124	29.1	9.3	22.0
低カーズ	男性	284	255	89.8	12	4.2	17	6.0	18.9	46.5
	女性	382	347	90.8	14	3.7	21	5.5	10.4	27.5
	合計	666	602	90.4	26	3.9	38	5.7	14.6	35.9

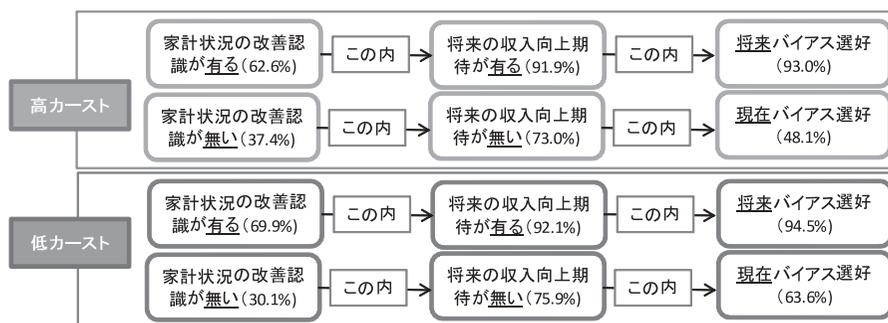
(注) 現在割引率は日利である。

(出所) フィールド調査

本調査結果で特徴的なことは、まず正統派経済学 (Samuelson 1937) が想定するような「現在」時点と「将来」時点において現在割引率が変わらない「変化なし」は、両カーズとも一部のみに見られたことである。これ以外は「現在」時点と「将来」時点で現在割引率が変化しており、このことは他の行動経済学の実証結果と整合的である。

また両カーストとも将来バイアス選好の割合が高いことも特徴的である。このような時間選好が形成されている背景について本研究では、過去5年間の家計状況の変化と今後5年間の見通し(収入向上期待)について調査した。下図は、その結果を纏めたものである。

図1 家計状況の変化, 将来の収入向上期待と時間選好



(注) 第2回目のフィールド調査時に実施したインタビュー調査の結果を集計。
(出所) フィールド調査

高カーストで家計状況の改善を実感している人は62.6%であり、その内91.9%が将来の収入向上期待を抱いている。更に、この将来の収入向上期待を抱いている人の内、93.0%が将来バイアス選好を有している結果が見られた。一方、高カーストの内37.4%が家計状況の実感を認識しておらず、この内73.0%が将来の収入向上期待を抱いていない。更に、このような人の48.1%が現在バイアス選好を示し他の時間選好よりも高い割合となった。この結果から、過去から現在にかけての家計状況の改善を実感することが、現在から将来に向けた期待の形成に繋がり、それが将来バイアス選好に結びついていることが見て取れる。この傾向は低カーストにも同様に見られた。このように、調査村では両カーストとも家計状況の改善を実感している世帯が多いことが、将来バイアス選好を有する人の割合が多い背景であると考えられる。

更に低カーストの将来バイアス選好を有する人の割合が高カーストのそれよりも高いことも、低カーストにおいて家計状況の改善を認識している人の割合が高カーストよりも高いことが影響していると考えられる。即ち、低カーストはカトマンズ市場の活況により竹細工製品の売上が増加し、そのことが家計を改善させると共に将来の収入向上期待を抱かせ、将来に比重を置く時間選好を抱く人の割合を高めている。ここで留意すべきは、低カーストは高カーストよりも豊かになったから将来に比重を置く時間選好を抱く人が多くなったのではなく、両カーストとも以前より家計状況が改善する中、低カーストは以前は貧しかった分だけ少しの家計状況の変化でも敏感に感じ取り、それが将来バイアス選好という時間選好の形成に繋がっているということである。例えば竹細工に従事しているある低カーストの女性は「5年前より収入が上がって、食糧も以前より食べられるようになって生活状況は改善している。5年後は、現在の仕事が続いてくれば、生活状況は更に良くなると思っている³³。」と述べている。

また現在割引率に着目すると、性別(男性・女性)や利得を得る時期(現在・将来)に関わら

ず高カーストの現在割引率は低カーストのそれよりも低い結果となった。高カーストは低カーストより経済状況が良好であることを勘案すると、この調査結果は、富裕層は貧困層より現在割引率が低くなるという先行研究の結果と整合的である。

このような時間選好テストの結果は、低カーストの内面の複雑さを表している。即ち、低カーストは経済状況が劣位な為に現在割引率が高く、高カーストよりも「せっかち」な傾向がある一方、同時に家計状況の改善から将来の収入向上期待を抱いており将来に比重を置く時間選好を有する割合が高い。言葉を換えて言えば、調査村では低カーストは経済的に劣位な状況に置かれていても短絡的に今日、明日の利益だけを見ている訳ではなく、低カーストなりに将来を見据えて生計を営んでいるということである。

5. 分析

本章では、このような経済的に劣位な低カーストの返済状況は裕福な高カーストより良好なのは何故かという背景を解明することを通じて、生計戦略が金融行動に与える影響を明らかにする。本章では融資行動を「支出」「借入」「返済」に分け、各段階で生計戦略がどのように影響を与えているのかを分析する。

5.1 支出行動—支出圧力に晒される高カースト

先述の通り高カーストの生計戦略では「住宅」と「教育」が主要な支出項目であり、また低カーストでは「住宅」と「生産活動」が主要な支出項目であった。このことを時間選好による視点から確認する。下表は「住宅」「教育」及び「生産活動」の支出を「主要な支出」と捉えている世帯割合とそのような世帯における平均支出額を時間選好別に分けて記したものである。

まず高カーストの住宅支出では、将来バイアス選好世帯³⁴の内27.6%が住宅支出を「主要な支出」として捉えており、そのような世帯による住宅支出の平均額は615,188ルピーである。一方、現在バイアス選好世帯では住宅支出を「主要な支出」と認識している世帯割合は21.1%である他、そのような世帯による住宅支出の平均額は163,750ルピーであった。このように高カーストの住宅支出では、将来に比重を置いて考える将来バイアス選好世帯の方が、住宅支出を「主要な支出」と捉えている世帯割合とそのような世帯による平均支出額の双方で現在に比重を置いて考える現在バイアス選好世帯よりも高い結果となった。この傾向は教育支出にも同様に見られた。

一方、低カーストの住宅支出では、住宅支出を「主要な支出」と捉える世帯割合は将来バイアス選好世帯と現在バイアス選好世帯で差異は見られないものの、その平均支出額では将来バイアス選好世帯の方が高い結果となった。また生産活動に対する支出においても、将来バイアス選好世帯の方がこの支出を「主要な支出」と捉えている世帯割合と、その平均支出額の双方で現在バイアス選好世帯を上回った。

このように両カーストとも将来に比重を置いて考えることが、生計戦略により求められる支出項目を「主要な支出」と捉える世帯割合と、そのような世帯による支出額を高めるという意味に

において、生計戦略の支出行動を強化していると言える。

表5 時間選好別の主要支出

	支出	住宅			教育		生産活動	
		母数	世帯割合	平均支出額	世帯割合	平均支出額	世帯割合	平均支出額
		(世帯)	(%)	(ルピー/世帯)	(%)	(ルピー/世帯)	(%)	(ルピー/世帯)
高カースト	将来B	116	27.6	615,188	44.8	114,604	11.2	117,885
	現在B	19	21.1	163,750	42.1	72,500	26.3	31,600
	全体	231	25.1	777,690	36.8	119,793	11.7	135,574
低カースト	将来B	255	49.4	477,103	6.7	35,324	29.4	54,611
	現在B	12	50.0	154,167	16.7	35,000	25.0	12,500
	全体	426	47.4	509,223	5.2	35,977	21.6	79,038

(注)時間選好テストでは将来バイアス選好や現在バイアス選好の他に「将来」と「現在」で現在割引率が「同じ」人も存在したが、生計戦略における支出行動の特徴を明確化するという本論文の趣旨から「将来バイアス選好」と「現在バイアス選好」を比較した。尚、表では将来バイアス選好世帯を「将来B」、現在バイアス選好世帯を「現在B」と表記した。

(出所) フィールド調査

5.2 借入行動—融資の借入に対し意識の高い低カースト

両カーストにおける時間選好別の融資借入世帯の割合と世帯当たりの平均借入額は下表の通りである。両カーストとも将来バイアス選好世帯の方が現在バイアス選好世帯よりも借入世帯の割合は低い。これに対し世帯当たりの平均借入額は、高カーストでは将来バイアス選好世帯が現在バイアス選好世帯よりも高い一方、低カーストでは将来バイアス選好世帯の方が低い。このように両カーストでは、借入世帯割合に大きな差異は見られない一方、その平均借入額は対照的な結果となった。

表6 時間選好別の借入状況

	高カースト			低カースト		
	借入世帯数	借入世帯割合	平均借入額	借入世帯数	借入世帯割合	平均借入額
	(世帯)	(%)	(ルピー/世帯)	(世帯)	(%)	(ルピー/世帯)
将来B	52	44.8	156,740	119	46.7	46,466
現在B	15	75.0	133,667	9	75.0	51,667
全体	108	46.0	183,458	185	43.2	42,719

(注)「平均借入額」は融資借入世帯のみを集計。

(出所) フィールド調査

このような両カーストによる借入行動の違いが何故生じるのか。この点を検討する為、両カーストの生計戦略において共に主要な支出項目であった住宅支出に焦点を当てる。

両カーストとも将来を考えるからこそ、このような住宅支出を「主要な支出」と認識する世帯割合とその平均支出額が増加する中、下表は両カーストの将来バイアス選好世帯による住宅支出

の資金調達法を纏めたものである。高カーストの将来バイアス選好世帯では将来を考えるからこそ融資を活用する割合が高い一方、低カーストの将来バイアス選好世帯では同じように将来を考えるからこそ自分の土地を売却して資金を用意する割合が高くなるという結果が見られた。

表7 将来バイアス選好世帯による住宅支出の資金調達法

	自己資金	融資	土地売り
	(%)	(%)	(%)
高カースト	51.4	28.6	20.0
低カースト	50.8	8.6	40.6

(注) 世帯毎に住宅支出の資金調達方法を「自己資金(貯蓄を含む)」「融資」「土地売却」から複数回答にて得た回答を集計。

(出所) フィールド調査

何故同じ住宅支出であり、又、同じ時間選好にも関わらず、両カーストでその資金調達方法が異なるのか。この違いは次の2つの要因により説明可能である。

まず1つ目は、生計戦略における融資の位置付けの違いである。下表は両カーストの融資目的別の借入件数を表したものである。高カーストでは融資の内53.7%が非生産目的に活用されている一方、低カーストでは63.8%の融資が生産目的に活用されている。これは、高カースト世帯では「会社勤め」や「牛の家畜飼育」という経済活動により安定収入を得ていることから、融資をこのような収入を得る為の経済活動や日常の支出に活用する必要性は少ない為である。このことから高カーストは融資を住宅支出の為に活用出来る。このように高カースト世帯の生計戦略では、融資は長期的なリスクに対応する為のものと位置付けられる。一方、低カースト世帯では、融資を農作業や竹細工などの生産活動に活用する必要がある。このように低カースト世帯の生計戦略では、融資は短期的なリスクに対応する為のものと位置付けられる。この為、低カースト世帯では住宅支出の為に融資は活用されず、自分の土地を売却して費用を賄っている。

表8 融資目的別の借入件数

	高カースト		低カースト		
	(件数)	(%)	(件数)	(%)	
生産目的	50	46.3	120	63.8	
非生産目的	58	53.7	68	36.2	
内訳	(教育)	13	12.0	5	2.7
	(住宅)	28	25.9	24	12.8
	(その他)	17	15.7	39	20.7
合計	108		188		

(出所) フィールド調査

2つ目の説明は、両カーストにおける融資借入に対する意識の違いである。このような融資の

借入に対する意識の違いは、融資を借りていない人の「借りない理由」により明らかにすることが出来る。即ち、そもそもカーストに関わらず融資を借りない人は、そのような借入需要がないことがその理由であるが、何故そのような需要がないのかという点で両カーストは異なっている。

低カーストの融資を借りていない人は、その理由を「これは融資を借りても利子も元本も返済できない為である。月収で賄えない分は、食料を減らすなどして対応している³⁵。」や「協同組合のお金は他人のお金なので、無暗に融資を借りることは良いことではない³⁶。」と述べるなど、協同組合の融資を借りることへ高い意識を有していることが見て取れる。一方、高カーストは「農業に従事していないのでその資金ニーズがない³⁷。」や「夫が給料を得ており、また牛の家畜飼育の牛乳販売からも収入がある³⁸。」と述べように、経済的裕福さから融資の借入需要が生じていない。また高カーストからは低カーストのように共同体的な意識から融資の借入に慎重となっていることを表す発言は見られなかった。

このような両カーストの融資借入への意識の違いは、両カーストの社会資本の違いに対応している。即ち、低カーストでは共同体的結びつきが強い社会資本であることが借入に対する高い意識に繋がり、高カーストではそのような結びつきの弱い社会資本であることが、このような借入に対する意識を生じさせない結果となっている。

このように両カーストの生計戦略の違いが、生計戦略における融資の位置付けや融資借入への意識の違いを通じて借入行動に対し影響を与え、高カーストの融資借入世帯では将来を考えるほど借入額が増加する一方、低カーストの融資借入世帯では将来を考えるほど借入額が低くなる結果に繋がっている。

5.3 返済行動—共同体意識が返済を促進させる低カースト

最後に融資の返済行動を分析する。下表は両カーストの時間選好別の返済状況を示したものである。

低カーストでは将来バイアス選好世帯の返済状況が現在バイアス選好世帯よりも良好である一方、高カーストでは逆の結果となっている。このことは低カーストでは将来を考えるからこそ返済をしている一方、高カーストでは将来を考えるからこそ返済を遅延させていることを意味している。

表9 時間選好別の返済状況

	高カースト		低カースト	
	世帯数	返済指数	世帯数	返済指数
	(世帯)		(世帯)	
将来B	52	0.40	119	0.61
現在B	15	0.52	9	0.58

(出所) フィールド調査

同じように将来を考えていながら、何故両カーストでは返済状況が異なるのか。それは共同体

的結びつきが弱い社会資本の高カーストでは共同体的信頼関係に立脚する金融スキームが「悪用」されている一方、低カーストでは共同体的結びつきが強い社会資本とこのような金融スキームの親和性が返済を促進させているからである。

例えば、ある高カースト世帯は5年前に家の新築を目的に村内の女性組合から10万ルピーを借り入れ、利子は毎月支払っているものの元本は未だに1回も返済していない。この世帯の主人は返済しない理由を次のように語っている。

「息子はあと3年でインド留学から帰ってくる。インドでは会計学を学んでおり、帰国後は会計士として高給を取ることが期待される。この為、これらの融資は息子が収入を得ることによって返済が可能になると考えている。利子はきちんと毎月支払っている訳だし、元本も支払わないと言っている訳ではない。特に女性組合は毎月500ルピーずつ貯蓄をしており³⁹、協同組合のお金はいわば自分のお金でもある。このことから返済が遅延しても何ら問題はない。教育や家の建築は将来の為であるが、融資の返済は将来の為ではない⁴⁰。」

この夫は公認会計士として12年間働いており、現在の月収は30,000ルピーと村内でもトップクラスの所得を得ている人物である。彼の言葉からは、①協同組合の利子は毎月支払うと言うルールは遵守していること、②「協同組合のお金はいわば自分のお金でもある」と述べるなど組合から融資を得ている意識は低いことが見て取れる。

また高カーストにおいて正規金融機関から借りた融資の返済指数は0.51である一方、在来金融組織による融資の返済指数は0.44であり、正規金融機関の返済状況が在来金融組織よりも良好な結果となった⁴¹。実際、商業銀行の融資を女性組合の融資で借り換えた高カーストは、その理由を「商業銀行の融資では担保をとられており毎月返済金を支払わなければならないのに対し、女性組合の融資では担保もいらず、またこれらの融資は自分のペースで返済することが出来るから⁴²。」と述べている。またこの人は女性組合のこの融資を返済期間を過ぎて完済していないことについて、「女性組合の融資は1年で返済しなければならないことは認識しているが、1年で完済出来なくとも利子が加算されるだけで大した負担ではない。」と述べている。このように高カーストでは、共同体的結びつきが弱い社会資本の中、在来金融組織の融資が「悪用」されていることが分かる。

一方、低カースト世帯では、例えば竹細工の為に協同組合から融資を借りた人が返済する理由を「融資を返済しないとまた次の融資を借りられないし、他の人も融資も借りられないから⁴³。」と述べている他、「自分達はいい加減に協同組合から融資を借りている訳ではない。この為、プロフェッショナルとして竹細工に取り組んで利益を出し、融資が返済できるように努力している⁴⁴。」と述べている。更に日雇い従事者は「自分達は低カーストで周囲からの信用が劣るので余計に、ちゃんと返済しなければと心がけている⁴⁵。」と述べ、返済へ高い意識を有することが分かる。このように低カーストでは共同体的結びつきの強い社会資本が、共同体的信頼関係に立脚した在来金融組織の融資返済への高い意識を醸成し、それが良好な返済状況に繋がっていることが分かる。

5.4 生計戦略が金融行動に与える影響

このように支出、借入、返済の各行動に対し生計戦略がどのように影響を与えているのかを見てきた。この分析から明らかになったことは以下の3点である。

1点目は、生計戦略は単一の経路ではなく、経済活動や社会資本など様々な経路を通じて金融行動に影響を与えている点である。本調査において生計戦略は両カーストの「支出」を規定するだけでなく、経済活動や社会資本を通じて「借入」や「返済」行動に対して影響を与えることが明らかになった。一方、先行研究においても生計戦略は経済活動（収入源）や社会資本、資金の捉え方を通じて金融行動に対して影響を与えていることが明らかになっており、この結果はこのような先行研究と整合的である。また、この結果は生計戦略の中のどの要素を通じて金融行動に影響を与えているのかという点に加え、生計戦略は融資行動の「支出」「借入」「返済」の各段階で影響を与えていることも表している。このことは、生計戦略の金融行動への影響は、従来の理解よりも複雑で多様であることを示している。

2点目は、特に「借入」や「返済」行動において、生計戦略と金融スキームとの親和性も、これらの行動を左右させていることが明らかになった。低カーストでは共同体的結びつきの強い社会資本が、在来金融組織の融資の借入・返済への高い意識を醸成している一方、高カーストではこのような結びつきの弱い社会資本が、逆に在来金融組織の緩いルールを「悪用」させている結果となった。先行研究でも、例えばLont (2004) はマイクロファイナンス機関のグループ貸付はインドネシアの「恥」の文化により機能しなかった実態を明らかにしながら、生計戦略を考慮しない金融スキームは機能しないことを示しており、この点も先行研究と整合的であると言える。

3点目は、両カーストとも生計戦略に沿って将来を計画している点である。高カーストの生計戦略では「会社勤め」の職を得る為には労働市場での競争を勝ち抜いていかなければならない為、共同作業を基盤とする伝統的な社会関係に依存する必然性が低い。一方、低カーストでは農作業や社会行事での共同作業が残っており、共同体的結びつきの強い社会資本が残っている。この為、このような共同体的なルールや規律に従って将来を計画する必然性や動機が高く、このことが返済を後押ししている。この為、時間選好の視点を用いることによって生計戦略による金融行動の特徴を明確に掴むことが可能となった。

6. 結論

本研究の目的は、ネパールにおけるフィールド調査で確認された「低カーストの返済状況が高カーストよりも良好である」という現象を解明することを通じて、生計戦略が金融行動に与える影響を明らかにすることである。先行研究では生計戦略により最適な金融行動が異なることが明らかにされている一方、生計戦略がどのように金融行動に影響を与えるのかという点については確たる理論が存在する訳ではない。このことから本論文では生計戦略の金融行動への影響をより明確に把握する為①金融行動を「支出」「借入」「返済」に分けること、及び②意思決定を分析する概念である時間選好を取り入れた。

ネパールで実施したフィールド調査では、調査村では金融サービスは広く普及していること、その主要なアクセス先は村内の在来金融組織であることが明らかになった。このような在来金融組織は、共同体的信頼関係に立脚した金融スキームであることが大きな特徴であった。

また調査村の生計戦略は、高カーストは会社勤めや牛の家畜飼育から安定収入を得ている一方、会社勤めの広がりや共同体的結びつきを弱体化させていた。また従来の農村経済では強固なカースト間関係により高カーストの社会的地位や経済的裕福さは保証されていたが、近年の市場経済化の広がりにより高カーストの地位は安定的ではない。この為、高カースト世帯では次世代に富を継承する為の住宅支出や子供に質の良い教育を与える為の教育支出が、生計戦略上の主要な支出であった。一方、低カーストでは農業や竹細工が主要な生産手段であること、また土壁の家に居住していることから、生産活動や住宅への支出が生計戦略上の主要な支出であった。これらのことから生計戦略は支出項目を規定していると言える。

両カーストの融資借入額を比較すると高カーストの方が低カーストよりも高い結果となった。このことを両カーストに共通の主要支出項目である住宅支出に焦点を当てて分析した。高カーストは安定収入を得ていることから融資を生産活動ではなく非生産活動に回すことが出来ること、また共同体的結びつきの弱さが借入に対する低い意識に結びついていることが、融資の借入を促進していることが明らかになった。一方、低カーストは農業や竹細工などの生産活動に融資が必要なこと、及び共同体的結びつきの強さが借入への高い意識を醸成し不必要な借入を抑制していた。

また返済状況は、低カーストは高カーストよりも良好であった。この背景は、高カーストでは融資への低い意識が在来金融組織の緩い返済ルールを「悪用」させ、返済を遅延させていた。一方、低カーストは反対に融資への高い意識が、在来金融組織の緩い返済ルールの中にあっても返済を促進させていた。このことは生計戦略と金融スキームの親和性が返済行動に影響を与えていることを意味している。

このように両カーストの金融行動の背後には、両カーストの経済活動や社会資本といった生計戦略の違いが影響していることが明らかになった。このことは、同一地域においても生計戦略が異なることによって金融行動が異なるという先行研究の結果と整合的である。一方、このような生計戦略の影響は「支出」「借入」「返済」の各段階で見られることから生計戦略が金融行動に与える影響は従来の理解よりも複雑であること、またそのような影響は時間選好の概念を用いることにより明確に把握出来ることも明らかになった。

尚、今般の調査では一つの村のみを対象としていることが本研究の限界点である。何故ならばネパールには山岳地域、丘陵地域、平野地域が存在し、それぞれの地域で生計戦略が異なると考えられるからである。また本論文ではカースト別に分析を実施したが、村落の実情に近づく為に職業別、不動産別、子どもの就学状況別の分析も今後の課題である。

注

- 1) 「金融行動」は一般的に融資、貯蓄、保険などを含むが、調査村では①保険サービスは提供されていないこと、②貯蓄があまり活用されていないことから、本研究では融資のみに焦点を当てた。調査村では貯蓄サービスへのアクセス世帯割合は高カーストで84.7%、低カーストで84.8%と高い一方、2つの女性組合に限ったデータではあるものの貯蓄を引き出したことのある世帯は貯蓄世帯の内、高カーストで11.3%、低カーストで12.9%とそれほど高くない。
- 2) 通常「支出」は金融行動には含まれないが、①融資の借入は何らかの支出の為に行われるという意味において「支出」と融資行動は密接な関係にあること、また②このことから自己資金により「支出」を賄うことをSelf-Financeと呼ぶことから、本研究では「支出」も金融行動に含めて分析をする。
- 3) 理論的な基礎付けはO'Donoghue & Rabin (1999)があり、実証分析では肥満(池田・大竹・筒井2005)、喫煙(Kang & Ikeda 2010)、薬物中毒(Kirby, Petry & Bickel 1999)、多重債務(Ikeda & Kang 2011, Laibson, Repetto & Tobacman 2000, Skiba & Tobacman 2008等)がある。
- 4) これらの調査世帯は融資の借入・返済状況、時間選好、支出状況を総合的に勘案して抽出した。
- 5) ネパールは公称で33以上の民族が存在するが、それらはカースト制により「パファン(ブラーマン)」「チェットリ」「ジャナジャーティ」「ダリット」に分けられる。本調査では、ネパール国内の慣例に従い「パファン」「チェットリ」を高カースト、「ジャナジャーティ」「ダリット」を低カーストに分類した。
- 6) 本論文において「正規金融機関」は「銀行・金融機関法」に規定される商業銀行、開発銀行、金融会社を指す。これらの正規金融機関の設立には中央銀行の認可が必要であり、その運営に関しても中央銀行の規制下に置かれている。
- 7) 本論文において「在来金融組織」は、協同組合や貯蓄グループなど住民が自主的に運営し共同体的規制の下で活動している組織を指す。厳密に言えば協同組合は「協同組合法」によりネパール政府(協同組合法局)への登録が義務付けられており、このような意味において「正規金融機関」であると見ることも出来るが、本研究では運営面の実態を重視した。
- 8) 高カーストの非会社勤め世帯の50.0%が牛の家畜飼育に従事しており、世帯当たり平均2.1頭の牛を飼育し年間76,125ルピーの収入を稼いでいる。(会社勤め世帯では牛の家畜飼育に従事している世帯割合は40.3%であり、世帯当たり1.3頭の牛を飼い年平均34,250ルピーを稼いでいる)
- 9) 高カースト/女性/32歳/2014年3月10日聞き取り。
- 10) 高カースト/男性/32歳/2014年2月11日聞き取り。
- 11) 厳密に議論するならば、特に高カーストではこのような「会社勤め」の職を得るには「アフノ・マンチェ(Afuno Manche)」と呼ばれる知人・友人ネットワークによる紹介も有力な手段である。本調査でも、新聞の求人欄の募集に応募し労働市場での競争を経て「会社勤め」の職を得ている人と、この「アフノ・マンチェ」により得ている人の両方が観察された。但し「アフノ・マンチェ」の活用といっても「会社勤め」の多くはカトマンズ市街地である為、このような職を得るには村外のネットワークが必要であり、村内の共同体的結びつきは「アフノ・マンチェ」としては機能していなかった。
- 12) ヒンズー教の元服式は「バルタバング(Balutabanda)」と呼ばれる。
- 13) 低カースト/女性/44歳/2014年3月10日聞き取り。
- 14) 高カースト/女性/25歳/2014年2月11日聞き取り。
- 15) 高カースト/男性/58歳/2014年2月5日聞き取り。
- 16) 高カースト/女性/37歳/2014年2月5日聞き取り。
- 17) 低カースト/男性/35歳/2014年2月25日聞き取り。
- 18) 低カースト/女性/57歳/2014年2月15日聞き取り。
- 19) 筆者は2回目のフィールド調査の際に調査村の高カースト宅にホームステイをしていたが、そのことを低カースト集落で話題にすると低カーストの人々は「高カーストはすぐに人を騙すから気をつけろ」と親切心から“忠告”してくれた。このような“忠告”には低カーストは高カーストをどのように見ているのかを明確に映し出している。
- 20) この5つの在来金融組織の内、2つは女性組合、1つは農業協同組合、1つは貯蓄融資組合、1つは貯蓄グループである。尚、貯蓄グループは政府に未登録の組織である。

- 21) 組合幹部は、このように運営に携わることにより月に数百ルピーから数千ルピーの「手当」を受け取っているものの、この金額は彼女達の収入水準からすると決して高額とは言えない。
- 22) 村内の5つの主要な在来金融組織の内、3つは罰則を設けていない。残りの2つは利子が3%加算される罰則を設けている。
- 23) 主に高カーストが利用する女性組合では、組合員の返済状況を監督し問題があれば正を促す「モニタリング委員会」が存在する。この委員会は組合幹部4名から成るが、そのメンバーであるサリタ・アチャーリア副組合長は「私達は家事もあり、また組合の毎月の貯蓄・融資業務もあるので、返済状況の悪い組合員の世話まで手が回らない。(2013年9月19日聞き取り)」と述べている。
- 24) 低カースト専用の女性組合の組合長(ウマ・ナガルコティ氏)より2013年10月15日聞き取り。
- 25) 例えば1年間の貸出期間で1万ルピーを借りた融資に対し、半年経過時点で3千ルピーしか返済していない場合を考える。返済期間は半年が経過しているので、貸出期間の半分(50%)を過ぎたことになる(これを「期間経過率」と呼ぶ)。この時、返済金額は1万ルピーの内の3千ルピー(30%)しか返済していない(これを「金額経過率」と呼ぶ)。言葉を換えれば、この状況は貸出期間が50%過ぎた時点にもかかわらず、返済金額は30%しか返済されていない状況である。この場合、「返済指数」は0.6(=「金額経過率30%」÷「期間経過率50%」)と計算される。
- 26) 本調査では調査時点で返済期間を超えているにも関わらず完済されていない融資を「延滞」と認識した。
- 27) 主に高カーストが利用する女性組合の副組合長(サリタ・アチャーリア氏)から2013年9月19日聞き取り。
- 28) 高カースト/女性/35歳/将来バイアス選好/2014年2月11日聞き取り。
- 29) 低カースト専用の女性組合の組合長(ウマ・ナガルコティ氏)より2013年10月15日聞き取り。
- 30) 例えばBauer, Chytilova & Morduch (2012)では、被験者に対し「明日貰える250ルピーと3カ月後の265ルピーならばどちらを選ぶか」という質問をし、回答者が「明日の250ルピー」と答えると、3カ月後の利得を265, 280, 300, 330, 375ルピーと順々に引き上げ、回答者が「明日の250ルピー」から3カ月後の利得に回答を変えた段階で、それらの金額を基に「現在」時点の現在割引率を計算している。次に、「1年後に得られる250ルピーと1年3カ月後に得られる265ルピーならどちらを選ぶか」という質問をし、先ほどと同様の手順で「将来(1年後)」時点の現在割引率を求めている。
- 31) フィールド調査では全戸調査の際に質問票の一部に時間選好テストを組み込んで実施した。具体的には①今日貰える3,000ルピーを1週間先延ばしするのに幾らの追加利得を求めめるのか、②1年後に貰える3,000ルピーを1週間先延ばしするのに幾らの追加利得を求めめるのかを質問した。全戸調査は村役場のソーシャル・モービライザー及び2つの女性組合の幹部の協力を仰いで実施した為、時間選好テストの方法を調査実施前に筆者がこれら協力者に訓練した。また調査開始後も可能な限り筆者も協力者に同行し調査の品質管理に務めた。
- 32) 現在割引率の算定方法もAshraf, Karlan & Yin (2006)やBauer, Chytilova & Morduch (2012)における方法を踏襲し次の数式で行った。 $k = (1/D)/(A/V - 1) \times 100$ (k: 現在割引率, D: 利得を延期した期間であり本調査では7日間, A: 利得を先延ばしすることに対して要求する金額であり本調査では被験者が回答した金額, V: 元の利得であり本調査では3,000ルピー)。
- 33) 低カースト/女性/50歳/将来バイアス選好/2014年2月10日聞き取り。
- 34) 本研究では世帯の家長(主に男性)の時間選好を以って、その世帯の時間選好として把握した。これはネパールでは男尊女卑の傾向が未だ強く残っており、調査村においても融資の借入や返済は家長が世帯の最終決定権者であることが多く観察された為である。
- 35) 低カースト/女性/60歳/将来バイアス選好/2014年2月10日聞き取り。
- 36) 低カースト/女性/32歳/将来バイアス選好/2014年2月11日聞き取り。
- 37) 高カースト/男性/40歳/将来バイアス選好/2014年2月26日聞き取り。
- 38) 高カースト/女性/38歳/将来バイアス選好/2014年2月27日聞き取り。
- 39) この高カーストが多く利用する女性組合では、毎月の貯蓄額は100~200ルピーが多い。
- 40) 高カースト/男性/51歳/将来バイアス選好/2014年2月11日聞き取り。
- 41) 低カーストでは正規金融機関の返済指数は0.57、在来金融機関の返済指数は0.62となり、高カーストとは対照的に在来金融組織の返済指数が高い結果となった。
- 43) 低カースト/男性/40歳/将来バイアス選好/2014年2月14日聞き取り。

- 44) 低カースト/男性/35歳/将来バイアス選好/2014年2月25日聞き取り。
 45) 低カースト/女性/30歳/将来バイアス選好/2013年11月1日聞き取り。

参考文献

- Ashraf. Nava, Karlan. Dean & Yin. Wesley. 2006. Tying Odysseus to the mast: Evidence from a commitment savings product in the Philippines. *The Quarterly Journal of Economics*. 121(2): 635-672.
- Bauer. Michal, Chytilova. Julie & Morduch. Janathan. 2012. Behavioral Foundation of Microcredit: Experimental and Survey Evidence from Rural India. *The American Economic Review*. 102(2): 1118-1139.
- Ellis. Frank. 2000. *Rural Livelihoods and Diversity in Developing Countries*. Oxford University Press.
- Ellis. Frank and Freeman Ade. H. 2005. *Rural Livelihoods and Poverty Reduction Policies*. Routledge.
- Frederick. Shane, Loewenstein. George & O'Donoghue. Ted. 2002. Time Discounting and Time Preference: A Critical Review. *Journal of Economic Literature*. 40(2): 351-401.
- Hospes. Otto & Prose. Mark. 2004. Secrets of Institutional Transformation: The Low Politics of Financial Self-help Organizations in Post-Colonial Africa. *Livelihood and Microfinance-Anthropological and Sociological Perspectives on Savings and Debt-*. edited by H. Lont & O. Hospes 2004 Eburon Academic Publishers: 237-260.
- Huq. Hamidul. 2004. Surviving in the World of Microdebt: A Case from Rural Bangladesh. *Livelihood and Microfinance-Anthropological and Sociological Perspectives on Savings and Debt-*. edited by H. Lont & O. Hospes 2004 Eburon Academic Publishers: 43-54.
- Ikeda. Shinsuke & Kang. Myong-II. 2011. Generalized Hyperbolic Discounting, Borrowing Aversion, and Debt Holding. *Osaka University ISER Discussion Paper No. 817*.
- 池田新介, 大竹文雄, 筒井義郎. 2005. 「時間割引率: 経済実験とアンケートによる分析」 *Osaka University ISER Discussion Paper No. 638*.
- 池田新介. 2012. 『自滅する選択』 東洋経済新報社.
- 岩間春芽. 2012. 「ネパール北西部農村における人の範疇化—援助と教育の広まりによる変化—」『現代インド研究』(2): 169-181.
- Kang. Myong-II & Ikeda. Shinsuke. 2010. Time discounting and smoking behavior under tax hikes. *Osaka University ISER Discussion Paper No. 782*.
- 川喜田二郎. 1997. 「ネパール発見」『川喜田二郎著作集10 ヒマラヤの文化生態学』:3-18. (初出 [1987] 『The Himalayas—ネパール・ヒマラヤの高峰』 藤田弘基撮影 ぎょうせい)
- Kirby Kris. N, Petry Nancy. M & Bicke Warren. N. 1999. Heroin Addicts Have Higher-Discount Rates of Delayed Rewards. *Journal of Experimental Psychology: General*. 128(1): 78-87.
- Laibson. David, Repetto. Andrea & Tobacman. Jeremy. 2000. A Debt Puzzle. *NBER Working Paper No. 7879*.
- Lont. Hotze. 2004. The Goose with the Golden Eggs; An Unsuccessful Linkage Group in Urban Indonesia. *Livelihood and Microfinance-Anthropological and Sociological Perspectives on Savings and Debt-*. edited by H. Lont & O. Hospes 2004 Eburon Academic Publishers: 195-214.
- Mazzucato. Valentina & Niemeijer. David. 2004. Savings Arrangements in Eastern Burkina Faso: An Evolutionary Perspective on Institutional Innovation. *Livelihood and Microfinance-Anthropological and Sociological Perspectives on Savings and Debt-*. edited by H. Lont & O. Hospes 2004 Eburon Academic Publishers: 153-170.
- O'Donoghue. Ted & Rabin. Mathew. 1990. Doing it Now or Later. *The American Economic Review*. 89(1): 103-124.
- Rahman. Aminur. 2004. Microcredit and Poverty Reduction: Trade-Off between Building Institutions and Reaching the Poor. *Livelihood and Microfinance-Anthropological and Sociological Perspectives on Savings and Debt-*. edited by H. Lont & O. Hospes 2004 Eburon Academic Publishers: 27-42.
- Rutherford. Sturart. 2004. The Microfinance Market: Huge, Diverse- and Waiting for You. *Livelihood and Microfinance-Anthropological and Sociological Perspectives on Savings and Debt-*. edited by H. Lont & O. Hospes 2004 Eburon Academic Publishers: 263-290.
- Samuelson. Paul. A. 1937. A Note on Measurement of Utility. *The Review of Economic Studies*. 4(2): 155-161.

- Skiba, Paige M & Tobacman, Jeremy. 2008. Payday Loans, Uncertainty, and Discounting: Explaining Patterns of Borrowing, Repayment, and Default, *Vanderbilt University Law School, Law and Economics, Working Paper Number*08-33.
- Zoetelief, Jochem. 2004. Microfinance from Below: Exploring Rural Livelihoods in Tanzania. *Livelihood and Microfinance-Antropological and Sociological Perspectives on Savings and Debt-*. edited by H. Lont & O. Hospes 2004 Eburon Academic Publishers: 57-66.